

特集
まえがき

アメリカのトランプ政権による 攻撃が始まったDEI（多様性・公正性・包摂性） —日本はどうなのか？

鄭 幸子

本特集は、DEI（多様性・公正性・包摂性）が担保されないがゆえの「生きづらさ」や「死」に関する論文、コラム、談話室、シナリオから成り、人種や民族、ジェンダーや性的指向、結婚や移住、言語や職業、国籍や外交といった様々な要因の複雑な交差に着目する。松村が本特集の執筆者らが共有した前提論文「フェミニスト・エスニック・スタディーズから人類学への提言」をレビューしている。まずはこのコラムを読んだ上で、前提論文にも目を通すと各稿の理解がより深まるはずだ。

ウィックストラムは、2024年に在留外国人が358万人を超え過去最高となったにも関わらず、日本では「差別問題や人権保障」への取り組みが遅いことを指摘し、マイノリティ女性らが抱える性差別と民族差別が掛け合わされた困難の中から、「学校選択」に焦点を当てる。教育機関における複合差別は「先生」であっても容赦無く襲いかかる。李は「フィリピン人英語講師」が搾取され、特に女性講師は性的な扱いさえ受けかねない実態を突きつける。

日本の植民地時代は「日本人」にされ、日本の敗戦後は日本国籍を一方的に剥奪された朝鮮人の末裔のひとりとして、金は思索しV. E. フランクルの『苦悩する人間』に裏打ちされた実践を続ける。平野は米国で理論化されてきた「パッシング（通用）」概念を用い、マイノリティがマジョリティとして「通用」することが、諸刃の剣になることを中高年ゲイ男性のケースをもとに分析する。DEIが認識され始めた日本でも今後「パッシング（通

用）」研究は、重要度を増すだろう。

というのも、「パッシング（通用）」を扱った文学や映像作品の中には国内外で高い評価を受けてきたものが幾つもあるからだ。光山のシナリオ「華子の一步」も、朝鮮名の「本名」、日本風の「通名」や「ペンネーム」を使い分けてきた人物の死から物語が始まる。平野やゴロウィナも「死」について触れ、DEIの欠落はマイノリティを苦しめ、死後も影を落とすことを照射する。自らの生き方への振り返りも伴う自己省察（self-reflexivity）が十分とは言えない科学への反省から、人文科学や社会科学ではオートエスノグラフィー（自伝的民族誌）が注目を集めている。ゴロウィナは自らの生き方や価値観を深く見つめ直しながら結婚移住女性を描き出す。

レイシャル・ハラスメントが他の人たちに起こらないようにとの願いも込めた控訴人の対峙する相手、モルガン・スタンレー社の本拠地米国では、就任早々トランプ政権がDEIへの攻撃を始めた。マジョリティの失策をマイノリティに覆い被せる差別者や共謀者、傍観者は、卑怯さと引き換えに自らの感受性を犠牲にしている自覚はあるのだろうか。

「自分の感受性くらい 自分で守ればかものよ」（茨木のり子）

問題解決に向け、身近なDEIの実践や次項で紹介する政治（家）への働きかけを、自己省察や控訴審の傍聴共々始めてみるのはどうだろう。

（ちょん・へんじゃ：岡山大学、文化人類学・フェミニストエスニックスタディーズ）